近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

三方よし（さんぽう）

第３２号

2008／10

CONTENTS

近江商人の足跡を訪ねて　仙台城下町と近江商人　2
大阪の「老舗」から学ぶ　前川洋一郎氏　6

淡海女子実務学校は創立当初４６名の女子生徒を迎えて始まり、大正13年には93名が通学していたと言われる。現在は共学の淡海書道文化専門学校（昭和60年開校）となっているが、外観や木造校舎内に当時のままの面影を残している。

昭和12年（1937）に奥行を縮小して神戸町（こうどまち）（旧町名）から現在の位置に移築された開知学校（国登録有形文化財）は文明開化を象徴するような洋館３階建て、八角形の櫓付きのモダンな校舎。現在は1階がビアパブとなっている。

長浜小学校の校庭にある浅見又蔵の胸像。「開知学校」は幼稚園、実科高等女学校（現在の長浜北高等学校）と変遷し、明治19年（1886）には校名を長浜学校と改め、児童数の増加に伴って、明治34年（1901）に現在の長浜小学校の場所に新築移転された。

近江商人に見る“教育”

今年度の三方よし研究所のテーマは「教育」です。最近の「教育」に関する大きな話題といえば、大分県教育委員会の汚職事件が気になります。教師も就職活動の一つとして考える現代だからこそ、起きた事件だったように思いますが、“教師”への信頼が薄れていくことに懸念している人も多いかと思います。

ところで、学校がまだまだ一般的でなかった時代、その創設者たちは、次世代の子どもたちへの教育の必要性を強く示唆し、信念を持って学校を創設しました。その中には近江商人も大きな力を発揮しています。

現在は淡海（たんかい）書道文化専門学校となっている淡海女子実務学校創始者は塚本さと。さとは天保14年（1843）に、今の東近江市五個荘町で近江商人・塚本定右衛門の五女として生まれました。寺子屋で「読み・書き・算盤」を、家庭で「裁縫・生け花・茶道」を学んださとは、商家の妻として一家を支える中で女子教育の大切さを痛感するようになります。74歳で夫を亡くした後、学校作りに向けて活動を始め、77歳の時、淡海女子実務学校を設立して校長となりました。そして地元を中心に県内から女生徒を集め、商人を支える内助者として育て、女子教育に力を注ぎました。

時代は変わって明治。滋賀県最初の小学校となる「滋賀県第一小学校」が長浜に誕生したのは、学制が発布される１年前の明治４年のことでした。長浜は町民の経済活動で財力をたくわえた豊かな町で、地元の人々の教育への関心は高く、人材育成の必要性をいち早く受け止めていました。その開知学校創設における第一の貢献者は浅見又蔵です。明治31年に長浜町長となった浅見又蔵は長浜の工芸品である浜縮緬を内外に広め、その私財を町の繁栄のために投げだし、利益の社会還元に努めました。特に学校への寄付は惜しみなく、教育に力を注いだ先覚者です。長浜の近代に貢献した第一人者として、長浜小学校の校庭に浅見又蔵の胸像が建てられています。

多くの人が学校に行きたくても行けない時代、教育へ資産を注いだ彼らの熱い思い、二氏はその教育の原点を教えてくれます。

近江商人の足跡を訪ねて

仙台城下町と近江商人

仙台藩の蔵方を務めた中井新三郎、日野出身といわれる仙台一の人気百貨店藤崎デパート、伊達藩御用菓子匠「九重本舗玉澤（ここのえ　たまざわ）」など仙台城下町と関わりのある近江商人の足跡を訪ねた。

安田生命ビル前の芭蕉の辻石碑

「芭蕉の辻図」（仙台市博物館蔵）。近江商人の出店が多く集まっていた

杜の都を歩く

伊達政宗を開祖とする伊達六十二万石の城下町として発展してきた仙台市は、東北の政治・経済の中心である。

人口一〇〇万人の大都会であるが、まちなかを通る広瀬川は、清冽な流れを見せ、杜の都と言われるだけに緑豊かな並木通りが心地いい都市環境をつくっている。

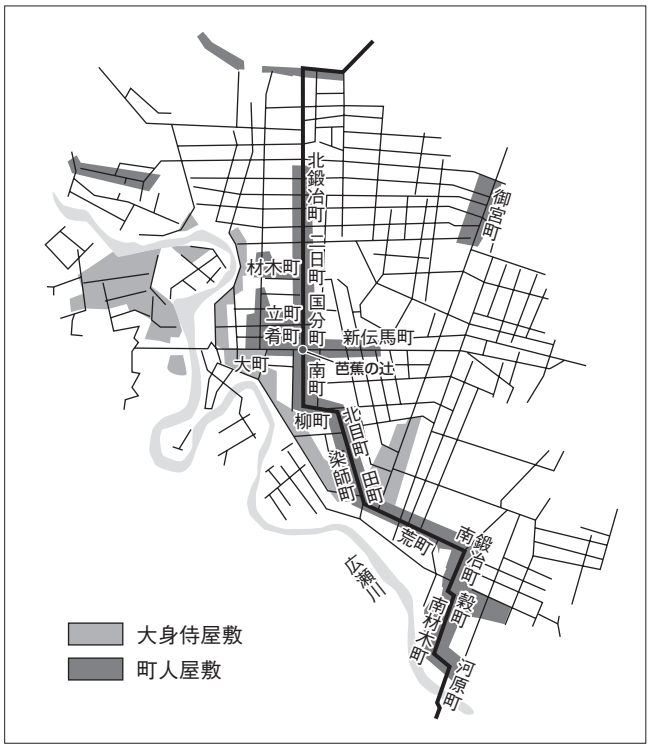
ケヤキ並木が続く定禅寺通りや青葉通りは、夏の七夕、初秋のジャズフェスティバル、冬のSENDAI光のページェントなど四季折々の賑わいを見せている。

訪問したのは残暑厳しき九月初旬、ケヤキ並木が作る木陰が厳しい日差しをさえぎってくれ快適に市内を歩き回ることができた。仙台城址旧三の丸にある仙台市博物館の学芸員の方やボランティアガイドさんの的確なアドバイスのおかげで短時間ではあったが概要をつかむことができた。

伊達政宗と仙台城下町

慶長六年（一六〇一）築城を開始した初代仙台藩主伊達正宗は、同時に城下町の整備をすすめ、奥州街道の道筋を大きく変えて仙台城下に通じさせ、城下から東西に走る大町通りとの交差点「芭蕉の辻」を城下町の中心として二つの道筋に町家を配した。町人町は二十四あり、大町（三、四、五丁目）、肴町、南町、立町、柳町、荒井町が御譜代町と呼ばれ、伊達氏についてきた町人たちが配され、彼らには特別な配慮があった。一方、伊達氏以前の国分氏ゆかりの町人には国分町、北目町、二日町で商いをおこなわせ、定期的に市を開く権利などの特権を与えて優遇したが、城下町が安定し商業活動が活発化すると同時に、独占的な市の存在はやがて廃止された。そして自由な商取引ができるようになると、才覚をもった新勢力の商人が台頭してきた。

仙台城下では日常的な商品については藩内および周辺から供給されたが、高級手工業品である木綿、絹布、小間物、薬種など六種については、大町に店を構える「六仲間商人」によって上方や江戸から輸送されてきた。六仲間商人は藩の保護のもと藩内の商業を独占的に支配するようになってきた。



仙台城下町の概略図（『仙台市史　通史編3　近世1』掲載図を一部省略および加筆）

大町日野屋源四郎から売り出された仙台祭渡物図（仙台市博物館蔵）

仙台東照宮は、承久3年（1654）に遷座祭が行われ、翌年より仙台祭りが始まり国分町や二日町は見物客で賑わった。城下を練り歩く豪華な渡物（山車）の一部を描いた「渡物図」が当日販売された。

「芭蕉の辻」

中井家の日野屋を始め、六仲間商人という大店の店舗は「芭蕉の辻」に集中し、藩政時代一番の賑わいを呈していた。慶長６年（1601）に仙台城の築城を開始した伊達政宗は、築城とともに城下町の整備を行い、城の大手門から東に伸びる大町と南北に走る奥州街道を基軸として碁盤の目状の町割りが行われた。伊達家に従って仙台に移ってきた商人は「後譜代町」に、城の周辺広瀬川沿いには重臣の武家屋敷が置かれ、周辺には中下級の侍屋敷が配された。これら武家屋敷に植えられた樹木が「杜の都」の原点をなしている。

道路拡幅工事などによって現在の繁華街はやや南に移っているが、大町通りと奥州街道が交差する場所には、昭和46年１月安田生命仙台ビルの建設に当たって、記念碑が建てられた。

城下町の面影を伝える櫓のモニュメント

戦災で焼失後に再建された仙台城の隅蔵

ところが、宝永四年（一七〇七）、同五年（一七〇八）の大火によって大町周辺は大きな被害を受け、城下町の商業は一時的に停滞し、城下町では空き家が目立つようになった。こうした事情に乗じて他国からの商人が仙台に集まってきたのであった。

城下町の繁栄を望む藩は、こうした他国からの商人の移入をむしろ歓迎したが、その代表が近江商人であったという。

仙台藩と中井家

仙台に入った近江商人の中でも仙台藩と大きな関係を持っていたのが、豪商で知られる日野の中井家であった。

初代中井源左衛門は享保十九年（一七三四）に伯父から借用した三両と売薬一駄を元でとして行商をはじめ、五年後に二十四歳で、栃木県大田原で質店を構え近江屋源三郎と名乗った。このとき数百両にまで資産が増えていたという。元文五年（一七四〇）には仙台大町一丁目で古着、繰綿の販売と質店をはじめ、屋号を日野屋新三郎とした。本店を近江に置いてはいたが、やがて仙台店の実績が拡大して中井家の本社機能は仙台にあり、仙台城下で四ヵ所以上の枝店や別家を有し、商圏は南奥羽から南部にまで拡大していた。

すでにこれ以前、伊達氏は、寛永十一年（一六三四）徳川家光から近江国蒲生郡・野洲郡五千石を拝領しており、このことが契機となって、日野商人が仙台に出掛け始めたらしい。そして一七〇〇年以降には小谷新右衛門ら日野から仙台に入った近江商人が増加し、当地で「日野きれ」と呼ばれた太物や呉服を多く扱ったとされる。

中井家仙台店は、代々中井新三郎を名乗っていたが、四代目中井新三郎（一八〇三～一八七一）が相続した時点で、仙台藩の御為替組御用達一〇人の中に入り藩の融資を行っていた。

仙台藩は、藩内で収穫された米のうち余剰分を買い上げ、江戸などに販売することで藩の財政を維持してきたが、凶作ともなればその制度はかえって農民を苦しめることにもなっていた。さらには幕府からの諸役負担や蝦夷地の警備などによって藩財政は一段と悪化し、大坂の豪商で蔵元を務めていた升屋からの融資が途絶え、代わりに日野屋に蔵元を依頼した。その後、日野屋は、仙台藩の財政担当奉行

青葉通りに面して建つ藤崎デパート

仙台一の繁華街東一番町通り

との関係が疑われ仙台店は閉店に追い込まれた。

一方、日野屋の閉店によって藩の財政は次第に手詰まり状態となって明治維新を迎える。

慶応四年（一八六八）鳥羽伏見の戦いに端を発した戊辰戦争で敗れた仙台藩は多くの領地を失い、江戸時代から保護してきた六仲間商人に対する藩の保護はできなくなり、商人の特権は奪われ、藩内の商業は競争激化してきたのである。

藤崎のロゴマーク

文政2年（1819）の創業当時の屋号は「得可主（寿）屋」と称していたので暖簾にはえびすを染め抜いていたが、荷印に使っていた「えびす」の「エ」をマーク化した方が有名になったので現在に至るまで「福徳円満、エビスヤのエ、一をもって貫く」の意味をこめた商標を使用している

仙台市民に愛される藤崎デパート

明治に入って、仙台から撤退した中井家がある反面、江戸時代中期に仙台に入ったと伝わる藤崎氏は新しい時代に呼応した事業展開を行ってきた。

出身地が確定できない「藤崎」

藤崎治右衛門は元禄年間から宝永年間に仙台に入ったとされるが、近江の出身だとの確証はない。しかし、当時、仙台に訪れた商人の多くが日野出身者であり、日野町別所には藤崎姓が多く、また「日野きれ」を扱っていたことなどから日野とのかかわりが考えられる。さらに、「藤崎」の創業者初代三郎助が創業の二年後に呉服の株仲間に参入した時、その保証人が日野出身の日野屋太兵衛であったことから、多くの研究者が日野出身であろうと考えている。それでも本店が近江になかったことから、『近江日野町志』には藤崎治右衛門の記載がない。

さらに一九九〇年に発行された『藤崎一七〇年のあゆみ』でも、さまざまな推論をあげつつも日野から仙台にやってきたとは断定していない。

「藤崎」のルーツは近江商人ではないかも知れないが、中井家が現存しない今、仙台で現在も隆盛の「藤崎」の事業展開について取材を続けた。

「藤崎」の創業者と百貨店事業

三代治右衛門の五男として生まれた祐助は兄の四代治右衛門の代に分家し、文政二年（一八一九）に大町二丁目に太物商を開業。本家の「得可主・屋」の暖簾分けを受けて「得可寿・屋（えべすや）」の屋号を得て、名を三郎助と改めた。この人が初代藤崎三郎助であり、「藤崎」の出発点となった。二年後に藩の許可を得て呉服仲間に加わり、嘉永六年（一八五三）には富商番付の最上位に位置した。

四代三郎助（一八六八～一九二六）は、明治維新後に本家が没落したなか、明治十二年（一八七九）には卸商から小売に転じ、大町四丁目に進出し、さらに同十五年には正札販売を始めた。

昭和八年（一九三三）には、三越仙台店が開店したが、藤崎では、その前年に藤崎呉服店からの脱皮をはかるために㈱藤崎と商号を改め、明治以降の繁華街となった東一番丁に新店舗を開店している。昭和七年には宮城県で初のエレベーターを設置した近代的な店舗を完成させ、地元一番店としての態勢を整えたのであった。

「藤崎」の社会貢献

藤崎は代々東北経済界の指導的な立場にあると同時に、常に全国地方百貨店で構成する業界団体においての牽引者である。

現当主は七代目藤崎正隆氏であるが、一九九四年に急逝した六代目三郎助氏は、一九七五年、仙台フィルハーモニー管弦楽団の設立から支援団体の会長を務め、一九九二年に財団法人仙台フィルハーモニー管弦楽団が設立されると既存の会長とともに財団の初代理事長に就任し、両方の面倒をみることとなった。「藤崎氏は、団員のボーナスをポケットマネーから出したり、借入れの保証人になるなど、氏の支援なしでは今日の仙台フィルはなかったといえる」（「七十七ビジネス情報二十九号」より）と地域での藤崎氏の社会貢献の一端が見える。

東北電力、アイリスオーヤマ、七十七銀行など地元企業が開催する仙台フィルのコンサートが定期的に行われているが、「藤崎」も「藤崎ニューイヤーコンサート」を開催し、仙台フィル

藤崎デパート屋上の「藤崎えびす神社」

「九重本舗玉澤」の戦前の店舗。ここが玉澤横丁と呼ばれた(『仙台の老舗』より)

の支援を今も続けている。

仙台には三越をはじめ大型流通店が多いが、多くの市民の信頼を得ているのが「藤崎」であるという。東一番町の「藤崎」の店舗にはブランドショップがテナントに入り、格式の中に洗練されたモダンな印象が強い。

奥州七福神のひとつ　藤崎えびす神社

「藤崎デパートの屋上には奥州七福神の一つえびす神社が祀られている」との情報を得たため、店内から屋上への通路を藤崎の社員さんに訊ねた。店内は九州物産展の最中で大変な混雑を呈している。口頭で案内を始めようとされたが、いきなり歩き出し、「ご案内します」と、屋上へのエレベーターの乗り場まで誘導いただいた。その親切な対応に恐縮しきり。仙台在住の人のブログを読むと、「藤崎」は何かにつけ他の百貨店と大きく水をあけている様子がうかがえたが、まさにその言葉どおりを体験した。

「藤崎」は創業時代より「えべす屋」を名乗っていたことから屋上に「藤崎えびす神社」を祀っており「奥州七福神めぐり」はみやぎ新観光名所一〇〇選にも選ばれている。参拝者のないときはひっそりして、店内の喧騒と乖離した静けさが漂う。スタンプラリーなどもあり、かなりの人気をはくしているという。

創業以来一八〇有余年を迎えた藤崎デパートは、時代の変遷とともに常に立地を模索しながら時代の風を感じ、一番店を堅持しているである。

玉澤横丁

常禅寺通り沿い、仙台市役所近くにひときわ目立つ建物がある。テクノアークという名称で、図書館を含む複合施設となっている。現代建築に呼応するように市内若手経営者の発案で秋にはストリートジャズフェスティバルが人気を集めている。「出演者が決まりました。プログラムを無料配布しています」との声が辻々で聞かれ、楽都「仙台」らしく、この催しの人気が高いことがわかる。

定禅寺通りの市役所前から城に向かう東一番町は、大阪の心斎橋のような通りであるが、この通りの一角に旧藩士山家(やまが)豊三郎の屋敷があった。

山家家は伊達藩の重臣で砲術指南役を務めていた由緒ある家系である。しかし、明治維新後、職を失った士族として生活の安定に腐心せざるを得なくなった。各地での見聞によって、この地は商業に生きるべきとの結論から、自分の屋敷を分割して小さな商家十数軒を建築し、自らも煙草屋をはじめた。このことが現在の東一番町の賑わいの大きな要因であったという。そしてこの屋敷があったところを山家横丁というのだ。

この話、実はミュージシャン稲垣潤一が編纂した彼の祖父柴田量平選集『仙臺東一番丁物語』に記載されているものである。

この山家横丁は別名「玉澤横丁」ともいい、山家の屋敷に隣接した国分町南角に玉澤伝蔵商店があったことに由来するという。

三〇〇年余続く伊達家御用菓子司「九重本舗玉澤」

「三方よし第五号」でも紹介したが、玉澤伝蔵は、延宝三年(一六七五)伊達家第四代藩主・綱村公の招きで近江から仙台に行き、仙台藩の城下・国分町に「御用御菓子司」として開業したのが「九重本舗玉澤」の始まりである。このとき店舗を構えたところがいつしか玉澤横丁と呼ばれていたのである。道路拡幅によって従来の店舗はないが、かつては店内に初代伝蔵の木像が置かれていた。現在は本社工場内の応接室に置かれ、従来どおり季節ごとに衣服を着せ替え、毎朝、茶と菓子が供えられている。

初代伝蔵には狐にまつわる話が残る。信心深い伝蔵が、路上で苦しんでいる狐を助けたところ、帰り道に分銅銀を拾った。これは狐の恩返しであろうと光潤神社を祀り、祭礼を欠かさなかったという。さらに店の別名を「光潤堂」としたところ商売はますます繁盛したという。

九重玉澤の商号にも由来があり、当店の名物九重は冬期限定で予約が必要であるが、明治天皇が仙台行幸の際、創作中の菓子を献上したところ、お供の東久世通禧公が

「いにしえの奈良の都の八重桜
けふ九重に匂ひぬるかな」

という万葉の古歌を思い浮かべて「九重」と命名されたという。明治三十四年に発売され、当時はユズだけを使っていたが、昭和になってブドウ九重やひき茶九重が加わった。お湯を注ぐと白い粒になって浮き上がる微妙な趣がある銘菓で、高い人気を誇る。伝統の中に新しい感覚を加えた「九重本舗玉澤」の銘菓は、地元百貨店やJR売店などで販売されている。

(取材　事務局)

大阪の「老舗」から学ぶ

老舗学研究会　**前川洋一郎 氏**
（関西外国語大学教授）

老舗学研究会代表の前川洋一郎氏から最近の研究成果に関するレポートを頂戴しました。すでに「三方よし30号」で老舗に関する概論を掲載しましたが、今回はその中でもとくに大阪商人に的を絞った報告がありましたので、紙上に転載します。

大阪商人のルーツ

堀井良殷（よしたね）著の『なにわの大阪興亡記』では、十五世紀末の蓮如の時代以前を「なにわ（難波）」、それ以降幕末までを「大坂」、明治以降を「大阪」と表記を統一しています。大阪の歴史のルーツは「なにわ」の時代、四天王寺と堺、そして平野郷につきあたります。

四天王寺は五九三年、上町台地を背景として、聖徳太子によって創られ、世界最古の老舗といわれる金剛組は、そばにあります。

堺は瀬戸内海を背景として、応仁の乱（一四六七～一四七七年）以降、四国との往来、明（中国）や南方との交易により、栄えた商業都市です。自治都市として有名で、進取の精神にあふれています。江戸時代以降は茶道、刃物を生業として、職人都市に変貌し繁栄しています。

平野は東洋のマンチェスターの原点といえる木綿、繊維の河内を背景としてできた商業都市で、平安時代より農工商が相交わる町で、商いの精神あふれ、戦国時代より自治都市で有名です。

この三つの原点が蓮如上人の石山本願寺、豊臣秀吉の大坂城築城によって政治経済の重心が上町台地とその前の埋立地「船場」に移動してきたのです。

そして徳川時代の大坂城復興によって船場に経済機能が集中され、ここを中心に大坂三郷で市場が誕生し、問屋、両替屋、豪商が発達し、商社、金融、財閥が成立したのです。

所説あるでしょうが、船場という地名の語源が「戦場」または「船着場」だったことから見て大阪商人の原点は船場であり、そのルーツは四天王寺、堺、平野ではないかと考えます。

その船場が発展して大阪にミナミの歓楽街、飲食街、「大阪のお腹」、キタのパブリック街、オフィス街、「大阪の顔」が分化し、その後背地に今里、東大阪の中小工業地帯の背骨、港に向かって前方地に居留地、中小商業地区の手足、そして湾岸工業地帯ができたと思います。そして、近代の大大阪（昭和初め以降の戦前）になったのです。

大阪商人の心情

大阪商人の心情や商いの精神、ビジネスのスタイルを現存の人に取材しても限界があります。しかし、大阪の文学や文化の中には大阪商人の歴史が最もよく残っています。

先ず学問では、現大阪大学にある儒学の懐徳堂があげられます。蘭学で有名な適塾です。

芸能では江戸武家社会の義理に対して上方は人情ものが多く、竹本義太夫の人形浄瑠璃や上方歌舞伎に、上方の人の心がよく投影されています。落語、地唄、能も盛んで、文学では町人、商人物、心中物が多く近松門左衛門の曽根崎心中、井原西鶴の好色一代男、日本永代蔵が有名です。どうも東への反骨、権威からの自由が根底にあるように感じます。

そして、戦前戦後の文学演劇をみると、もっと明確に大商人の姿が見えてきます。大谷晃一著『大阪学』では、大阪商人は四つのパターンに分かれます。

一つ目が谷崎潤一郎の『細雪』や織田作之助の『夫婦善哉』に見られるしっかり女と頼りない男の組合せ、そして夫婦で商いをたてていく姿です。

二つ目が山崎豊子の『暖簾』、菊田一夫の『がめつい奴』、花登筐の『どてらい奴』に見られる、ぼんさんとこいさん、番頭はんと丁稚どんの組合せ、ど根性、地べたをはって商いをたてていく姿です。

三つ目が今東光の『闘鶏』、野坂昭如の『エロ事師たち』、小松左京の『日本アパッチ族』、村田秀雄の「王将」、城山三郎の『黄金の日々』に見られるホンネに生き、ええかっこせずベンチャーに挑戦して商いをたてていく姿です。

四つ目が田辺聖子のドラマ、花登の「てなもんや三度笠」藤山寛美のアホ役、一昔前の吉本のドタバタに見られる町人、サラリーマンの絆を大事にして商いを立てていく姿です。

大阪に住まないで関西のことをとやかくおっしゃる人や二～三年単身赴任できて阪神間のマンションと、北新地だけ見てわかった顔をする政、財、官、学、マスコミの方々にはもっと大阪文化を勉強してもらいたいと思います。具体的には、和田亮介著『扇子商法』、田辺昇一著『関西商法』、藤本義一著『お金で買えない商人道』でもよくわかります。

大阪商人の本質

大阪商人のルーツ、心情からさらに問い詰めて大阪商人のビジネススタイル、考えの背景を見てみると、それが大阪の老舗の本質になると考えられます。

明治生命保険の『ザ・関西商法』をみると、図1の通りです。関西商法といってもイメージは大阪にウエイトがあり、京都商

法や神戸商法が含まれません。特に、シンボル、仕組、特質では、東京や他府県との違いが鮮明です。ソロバン、のれん、自由、丁稚、始末手堅さに大阪の特質が見られます。

そして、今日大阪の老舗の取材などから精神本質の源流を筆者なりにまとめてみますと、次の三つとなります。

第一は室町時代頃より興った近江商人です。船場を中心に商社、メーカーに近江の流れは今も続いています。「質素倹約―始末してきばる、浮利に走らず、もうかりまっか、もったいない、やってみなはれ、みとくんなはれ」

第二は十八世紀京都に興った石田梅岩の石門心学です。「堪忍、律儀―町人の世渡り術、倹約、武士の商人蔑視を批判。士農工商の区別に耐える利益の正当化」しています。

第三は江戸時代からの船場における「暖簾」です。商号としてのもの、幕としての機能ではなく、「のれん」の一言に秘める大阪商人の口伝、心意気が原点と思います。

「自分の土地、家を守る」、「お上の手の届かんとこで頑張る」、「相続は婿取り歓迎」。

この三つが最も大阪商人、大阪の老舗に影響を与えているのではないでしょうか。

図1　関西商法とはなにか

源流・イメージ	大阪商法 60%	船場商法 51%	松下商法 40%
シンボル	ソロバン 71%	のれん 57%	戒さん 41%
仕組制度	自由競争 52%	丁稚 43%	養子 34%
特質	自力民活 98%	始末手堅さ 97%	実践 96%
典型	松下幸之助 86%	小林一三 66%	鴻池善右衛門 39%
商いごころ	家憲家訓 76%	西鶴思想 47%	船場学校 42%
本質	死に金使わず		
	生き金使え 41%	損して徳とれ 36%	正路に商いすべし 32%

図2　老舗にとっての新たな課題!!

(1)同族ファミリービジネス ➡ ガバナンスの仕組
(2)事業継承・相続 ➡ 新しい暖簾分け
娘の活用
(3)学校教育、社会教育 ➡ 組織人が全てではない
(4)地域との共生 地住で街づくり街興しに参画
(5)ネットワーク ➡ 圏外との商いが大事
(6)地元の商工政策 ➡ 後期高齢企業の永続

老舗から学ぶこと

学ぶべき経営戦略と課題

ここで申し上げるべきことは、大阪の老舗に限定したものではありません。全国の老舗を勉強していることから学ぶことです。

先ず老舗から学ぶ経営戦略の第一に「うちわ」から「扇子」があげられます。バタバタ自らあおぐのはベンチャーの頃です。老舗になれば、小さくとも品よく扇子の風を楽しむべきです。そして扇子は目一杯開いてもいけません。少したたみやすく、余裕を残すことが大切です。

第二が「衝立」から「屏風」です。衝立は真っ直ぐですから押したら倒れます。屏風は折れていますが真っ直ぐにすると倒れます。玄関に入ってすぐに見える衝立は、構えすぎです。屏風は奥間で目立たず気張ってはいけません。

第三がゴールを切る「テープ」から、受け渡しする「タスキ」です。テープは切ったら終わりです。タスキは受け取れば、身について大事にし、役目が終わる前に、次の人へ責任を持って渡すのです。

要は老舗の経営戦略の極意は「バタバタするな」「突っぱるな」「切ったらおしまい」です。「なりふりかまわず」いけないことはしてはいけない。永続する責任、使命があるのです。現在老舗で話題になっていることは、そのまま図2の老舗の経営課題なのです。

一つは同族ファミリービジネスにおいてはコーポレートガバナンスの問題です。昔の家長制は通じず、株公開だけが解決策ではありません。創業者亡き後、中興の英主の後、誰が仕切るのか、どんな仕組みがよいのか、大企業を主な対象とする経営学からは、答えが出ていません。

二つは事業継承、相続の問題です。フランチャイズ方式やブランドマネジメントもいいですが、少子高齢化時代、婿養子よりも娘がそのまま後を継ぐことが脚光を浴びています。税制の改革も進んでおり、新しいタスキ渡しの方法が望まれます。

三つは学校教育、社会教育における職業観、人生観の見直しです。これまで高度成長を追うあまり、組織人は出世競争に偏重しすぎたのではないでしょうか。職の多様化、少子高齢化の時代、もっと商人・職人・町人を大事にする教育が必要だと思います。

四つ目は地域共生です。若い内やベンチャーの段階から、街や、業界の役回りを引き受けることはありません。しかし何もしない唯我独尊はいけません。若いなりに小さいなりに、地域活動、業界活動の下っ端として汗をかくことも必要です。街づくり、街おこししても老舗が立ち上がらずして誰が立ち上がるのでしょうか。

五つはネットワークです。地場を守ることも大切ですし、分を過ぎた投資はいけませんが、NETの活用などで県外との商い、広くお客様のいるところへ釣り糸を垂れることが必要です。

六つは街の商工政策です。ベンチャーも必要ですが、今あるものがもっと続くような商工政策が必要ではないでしょうか。つぶれかかったシャッター通り、風俗化したブロック、穴の開いた工業団地をみて慌てる前に、地元の老舗を把握し、永続させる街づくりが大切です。後期高齢者医療制度ではなくて、後期・高齢企業・永続政策です。もちろんのこと、老舗も役所に補助金など甘えてばかりではなく自助・共助・公助のステップでいくべきですし、お互い知恵と汗を出し合うことです。

以上のことを解明して、お役に立つことが「老舗学」の役割と改めて認識する次第です。

第32号（第15巻 第32号）■発行／NPO法人三方よし研究所 〒522-0004 滋賀県彦根市鳥居本町六五八 TEL〇七四九（二二）〇六二七 E-mail info@sanpoyoshi.org URL http://www.sanpoyoshi.org

第22回　なるほど三方よし講座開催のご案内

近江聖人「中江藤樹」の心に学ぶ

近江聖人と呼ばれる中江藤樹先生の生誕400年祭が旧安曇川町を中心に開催されています。安曇川は琵琶湖の西岸、扇骨の生産額が全国の90%に上る静かな町で、多くの文化資源が残ります。

三方よし研究所では本年「近江商人と教育」をテーマに「なるほど三方よし講座」を開催します。多くの近江の人々の精神土壌になった藤樹先生の教えに学ぶ講座を企画しました。深まりゆく湖国の秋を楽しみながら、400年の歴史を伝える「雲平筆」攀桂堂の見学や湖畔での昼食も準備しました。

この機会に是非ご参加ください。

開催日　平成20年10月25日㈯
（10時湖西線安曇川駅集合　15時解散）

講　師　上田藤一郎氏（中江藤樹記念館館長）
第15代　藤野雲平氏（攀桂堂）

場　所　高島市マキノ町海津周辺

日　程

10時	湖西線安曇川駅集合　徒歩で中江藤樹記念館へ 講師による中江藤樹記念館ご案内 藤樹書院に移動、藤樹先生についてのご案内 藤樹先生らの墓所見学
12時30分	バスにて白浜荘へ 白砂青松の湖岸での昼食 昼食後バスで安曇川まで移動
13時30分	400年の歴史を刻む攀桂堂（雲平筆）へ 伝統の技法見学とミニ講演
14時40分	徒歩で道の駅「藤樹の里あどがわ」へ移動
15時	高島扇骨見学後に解散

藤野雲平氏

創業元和元年（1615）。京都禁裏御所のご用達に始まり正徳年間5世雲平のときに攀桂堂（はんけいどう）の屋号を近衛家より賜る。伝統の巻筆の技法を今に伝え、宮内庁や多くの書家からの特別注文を受ける。

参加申込み締め切り
平成20年10月17日㈮ 先着30名様

参加費　4,000円
（当日持参ください。なお集合地までの旅費などは各自ご負担ください）

■主催　NPO法人三方よし研究所
TEL：0749-22-0627 FAX：0749-23-7720
Eメール：info@sanpoyoshi.org

●近江商人に関する出前講座を承ります

三方よし研究所では、広く近江商人の実態や経営理念を普及するための出前講座を実施しています。ご要請に即した講師を派遣いたします。詳細は事務局までお問い合わせください。ホームページでもご案内しています。お問い合わせは TEL 0749 − 22 − 0627 もしくは

三方よし研究所　検索

● NPO法人三方よし研究所

近江商人の経営理念である「三方よし」が現代社会の中での生活規範となるよう様々な活動を行っています。詳細は下記事務局までお問い合わせ、またはホームページをご覧ください。情報紙「三方よし」の無償配布および各種講座へのご案内などがあります。
問い合わせ先　TEL 0749 − 22 − 0627

近江商人関連書籍のご案内

近江商人の金融活動と滋賀金融小史
浜上清二著
B5判272頁　定価4200円（本体4000円）

CSRの源流三方よし
『近江商人学入門』
末永國紀著
B6判212頁定価1260円（本体1200円）

『近江商人ものしり帖』改訂版完成
ビジネス成功の源泉「始末してきばる」「もったいない」「世間さま」のこころ
NPO法人 三方よし研究所 発行
新書判148頁　定価840円（本体800円）

近江商人家訓撰集
『近江商人の理念』
小倉榮一郎著
A5判136頁定価1260円（本体1200円）

てんびん棒

本年は2月と9月、東北の近江商人にかかわりの深い都市を訪ねる機会があった。駆け足ではあったが、近江商人の活躍のようすをかいま見ることができた。すでに本紙で概略の紹介をしているが、いずれも地場産業を現代的な商品として製作し、積極的な販売戦略を講じていた点が興味深かった。

山形市のデザインハウスでは山形工科大学が中心にNPO法人が運営し、世界的に著名なデザイナーらも参画して、伝統的な産業を新しい感性でデフォルメした商品化が進み、大きな成果をあげていた。

そして9月に訪れた仙台メディアテークは「最先端の知と文化を提供」するという理念のもと図書館はもとより最新の知識や情報提供の場として、市の中心地に立地し、大勢の利用者であふれていた。まるで都心の劇場のような華やかさがある。建物自体もユニークであると同時にその運営にも公共施設とは思えない自由な雰囲気が漂っていた。図書館後進県であった滋賀県が今や先進県となったが、それ以外の文化の取り込みはまだまだ遅れている。優れた文化資源や工芸品を輝かせる舞台づくりが急務であろう。

★本紙は滋賀県よりの補助金を受けて発行しています。